

《庭》から始まる物語

本作の執筆に取りかかるにあたり、最初に思い浮かべたのが《庭》の光景でした。

語り手は探偵役と、寺院の庭で出会います。肯定的な言葉では形容しがたいその出会いをきっかけに、主要人物たちがひとつの《家庭》を築こうとするところから、この物語はスタートしています。したがって、本作のテーマは設定の段階で半ば自動的に浮上したものであり、それは連作でありながら独立した四つの短編すべてを貫くものにもなっています。

ところで仏教思想と庭というのは、古来より関わりの深いものであったようです。

平安から鎌倉にかけて、日本では浄土庭園と呼ばれる形式の庭園が各所に造られました。これは極楽浄土を再現した庭園のことで、阿弥陀堂のそばに池を設けて蓮を浮かべ、渡された橋は現世と浄土をつなぐ意味を持っていました。代表的な浄土庭園として、平等院鳳凰堂が知られています。

浄土庭園が造られた背景には、平安末期より流行した末法思想の影響がありました。これは要するに終末論と似たもので、お釈迦さまがいなくなつたこの世はやがて終わりに向かっていく、という思想です。そこで、死後の魂を浄土へと導く阿弥陀如来が盛んに信仰されるようになり——他力本願という言葉は本来、修行など自力で悟りを開くのではなく、阿弥陀如来の本願によって救済されることを意味します——阿弥陀如来を祀る阿弥陀堂を中心とした、浄土庭園が造られるようになりました。この世に浄土を再現してしまえば真の浄土へも行けるに違いない、という考えがあったのですね。

その後、室町時代には、大自然の中で悟りを開かんとする禅の思想を取り込む形で、禅宗庭園が発達していきました。臨済宗の高僧であり数多くの庭園を造つた夢窓疎石が、浄土庭園から造り変えた西芳寺の庭園は禅宗庭園の最高傑作ともいわれ、後世の日本庭園に多大な影響を及ぼしています。枯山水は現代に通ずる日本庭園の形式ですが、これはこの時代の禅宗庭園に端を発しているのです。現代でも各地の寺院で、お坊さんが小石や白砂で砂紋を作っている光景を見かけることがあるかと思いますが、庭を美しく整えるという行為の根底には禅の思想があるわけです。

このように、日本庭園の発展の歴史と、仏教思想は不可分でした。そこで話は、寺院を舞台とした本作の設定に戻ります。

正直に言えば、私はここまでしたためてきたようなことを、執筆初期の段階で知っていたわけではありませんでした。それでいて物語の最初に寺院の《庭》を思い浮かべたということは、執筆を終えて振り返るにつけ、何だか必然であったような気がいたします。

ところで本作のテーマに《家庭》が深く関わることは、冒頭でも記しました。よく見ればこの家庭という言葉にも、《庭》が含まれていますね。気になって語源を調べたところ、これは文字どおり《家の庭》を表していたものが転じて、家の中や家そのものを指すようになったのだそうです。ひねりはありませんが、こちらの側面から見ても、やはり家族の出会いの場に庭を思い浮かべたのはある種の必然と言えそう。

私事になりますが、私は大学卒業後、およそ六年間にわたって父方の実家の寺院に勤めていました。お寺で留守番をしながら小説を執筆するようになり、やがて作家としてデビューしてからも、しばらくはお寺での手伝いを続けていました。本作の連載も、その最中に開始しています。将来が見えず不安な時期に生活のよりどころとなっただけでなく、数多くのとても大事なことを学ばせてくれたお寺という場所、仏教文化、そしてお世話になった方々には、いまでも感謝にたえません。

そんな私の経験がどこまで生かされているかは心もとないのですが、本作を執筆しているとき、まるで自分のホームグラウンドにいるような——つまりは、慣れ親しんだ《庭》にいるような感覚がありました。心地よく楽しい、充実した執筆でした。

本作を手にとってくださいましたみなさまにも、楽しんでいただけましたら幸いです。

岡崎琢磨